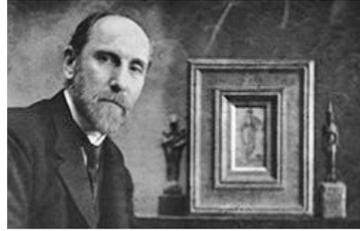


デトロイトの秘宝 「フリーアハウス」

チャールズ・ラング・フリーア(Charles Lang Freer、1854-1919)という、デトロイトと日本にゆかりの深い人物のことをご存知でしょうか？彼は、ヨーロッパで活躍した米人画家ホイッスラーの作品をはじめ、東洋、中近



チャールズ・ラング・フリーア
1909年、デトロイトのフリーアハウスにて。
額に入っているのはホイッスラーの絵。
写真提供：フリーア美術館

東の美術を蒐集した。彼のコレクションは、首都ワシントンのスミソニアン博物館群の一つであるフリーア美術館に収蔵されている。尾形光琳の群鶴図屏風や俵屋宗達の松島図屏風といった、日本にあれば重要文化財、国宝間違いなしといわれている逸品が数多くそろっている。しかし、世界第一級の東洋美術コレクションといわれながら、フリーアの遺

言により美術館の作品は門外不出のため、あまり広く知られていない。このワシントンDCにあるフリーア・コレクションの発祥の地は、実は意外にもデトロイトだったのである。

時代は今から100年以上遡るが、旅行ガイドブックの草分け的存在はドイツのベーデッカー社版(Baedeker's)だった。今ではミシュランのガイドブックが有名であるが、ミシュラン以前のヨーロッパでは、ベーデッカーという社名が旅行ガイドブックの代名詞として使われるほどだったという。そのアメリカ版が発行された時、デトロイトで見るに値する所としてたった一ヶ所だけ選ばれたのが、19世紀末デトロイトの鉄道産業で財を成したチャールズ・フリーアの邸宅であった。幸いフリーア邸(通称フリーアハウス)は、デトロイト美術館(DIA)のすぐそばに今も残っている。現在はWayne State Universityに属するメル・パーマー・スキルマン研究所がオフィスとして使っているので、普段はフリーアハウスへの関係者以外の立ち入りは難しい。しかし、来る10月25日(日曜)午後3時半から5時まで一般公開される。フリーアハウス友の会(Friends of the Freer House)の方々が説明しながら邸内を案内してくれるので、この絶好の機会をお見逃しなく。

10月25日(日曜) 午後2時 デトロイト美術館(DIA) レクチャーホールにて講演
リンダ・メルル博士(Linda Merrill, Ph.D. フリーア美術館の元学芸員でホイッスラー研究者)の講演
「青の部屋: デトロイトにあったホイッスラーの孔雀の間」 “The Blue Room: Whistler's Peacock Room in Detroit”
そのあと、午後3時半から5時間まで、フリーアハウス(71 E. Ferry, Detroit)にてレセプション・見学

- ・上記の講演には予約は要らないが、大人 \$ 8、子供 \$ 4のDIA入場料が必要。
- ・上記のフリーアハウスのレセプション・見学には予約が要るので、電話(313)872-1790かmpsi@wayne.edu あてにEmailで。(見学が許されるのは、年間3、4回ある特別行事の時だけ。他の日の見学は不可。)
- ・DIA入場料とは別に、フリーアハウス見学には\$10 要るが、これは当日、フリーアハウスの受付で払えば良い。(フリーアハウス友の会の会員は見学無料。)
- ・友の会年費は大人/家族\$35、学生\$10。ウェブサイト→ <http://mpsi.wayne.edu/about/friends-freer.php>

筆者の経歴

弘子Lancour 福岡市生まれ。国際基督教大学教養学部語学科卒業後渡米。Wayne State University コンピューターサイエンス科卒業後、Blue Cross Blue Shield of Michigan勤務。現在、Wayne State University大学院修士課程在籍中。絵画専攻。
E-mail: hirokolancour@yahoo.com



写真提供：フリーアハウス友の会

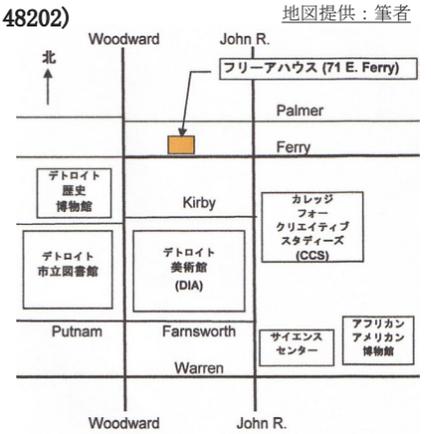


フリーアの上司、フランク・ヘッカーの屋敷
写真提供：ミシガン州歴史保存室

フリーアハウス (住所: 71 E. Ferry, Detroit, MI 48202)

デトロイト美術館(DIA)から北へ向かって1ブロック進むと、Ferryという通りにでる。WoodwardとJohn Rに挟まれたほぼ中間地点にある黒ずんだ渋い建物がフリーアハウスである。DIAからは徒歩で2、3分。西隣のWoodwardとFerryの角に、フリーアハウスとは全く対照的なフレンチシャトー風の建物がある。これは、フリーアの上司だったフランク・ヘッカーの屋敷であったが、現在は法律事務所として使われている。

断っておくが、現在、フリーアハウスは、たとえばヘンリー・フォード邸のように、常時一般公開されている博物館ではない。前述したように、大学の研究所として機能しており、必要に応じてオフィス向きに改造されたりしているため、100年前の面影は薄れてしまった。そのことを危惧するフリーア友の会は、屋敷の復元・保存・修復に力を注いでいる。



地図提供：筆者

フリーアハウスの見どころ

1. 建築様式

フリーアハウスの建築様式は、クイーンアン様式の一つでシングルスタイルとよばれている。1880-1905年頃、米国の北西部を中心に流行した。シングル(屋根)材を屋根だけでなく外壁にまで使っているのと、塔のあるベイウィンドウや建物の一階を囲む回廊(ポーチコ)などが、この様式の特徴。しかし、フリーアハウスは普通のシングルスタイルと違って、一階の外壁にはシングルではなく、フリーアの生まれ故郷ニューヨーク州から切り出してきた石材が使われている。

フリーアハウスの設計を担当したのはフィラデルフィアの建築家、ウィルソン・エア(Wilson Eyre, Jr.)。カレッジ・フォー・クリエイティブ・スタディーズ(CCS)で建築史を教えておられるフリーア研究家のトーマス・ブランク(Thomas Brunk)博士によれば、フリーアハウスに日本建築の影響を見ることができるといふ。たとえば、屋根の線や床の間という概念。1892年にフリーアハウスが落成した時、フリーアはまだ日本を訪れたことはなかったが、大森貝塚の発見で知られているエドワード・モースが書いた日本の家屋についての本を読んでいたため、日本建築についての予備知識があったという。

2. インテリア

フリーアは、彼が支援していた米国人アーティストたちに室内装飾デザインの意見を求め、壁の色、家具、額縁、欄干、彫り物、窓ガラス、ドア、そしてドアベルにいたるまで、すべて彼の美意識に合うように特別注文した。しかし、フリーアが好んだ優雅で奥ゆかしい洗練された色合いは、残念ながら今は塗り替えられたペンキの下に隠れてしまっている。

3. 絵画

当時フリーアが支援していたホイッスラー以外の米人画家は、ドワイト・トライオン(Dwight Tryon)やトーマス・デューイング(Thomas Dewing)等であった。彼らの画風はトナリズム(色調主義)とよばれ、どこか神秘的で、哀情感の漂った表現が特徴。色調を限定してそのトーンの変調によって雰囲気や醸し出す描法だが、水墨画の霧や霞のような朦朧感がある。フリーアハウスの玄関を入ってすぐのホールには、トライオンの春・夏・秋の風景画3点と朝と夜の海の風景画2点、そして、ホールの右手にあるパーラーにはデューイングの女性を描いた絵4点が飾られていたという。これらの絵は、現在ワシントンのフリーア美術館に収められている。最近、有志の寄付により12枚の絵画の複製が完成した。フリーア在りし日の頃、本物が掛けられていたのと同じ場所にレプリカが展示されることになっている。今回の一般公開イベントはそのお披露目も兼ねているようだ。

4. ギャラリー

フリーアハウスには、美術品の鑑賞と展示のためのギャラリーだった部屋が2つある。最初のギャラリーはコレクションが増えたため手狭になってしまい、新しく2つ目が必要となったからである。彼は、自然光のもとで鑑賞するのをよしとしたので、天井にはスカイライトをほどこし、側面の窓からの光線にも気を配った。ワシントンのフリーア美術館のデザインにもこの自然光への配慮がなされている。後に出来た2番目のギャラリーの正面に暖炉があるが、フリーアの友人でピワビックポッター(Pewabic Pottery)の創始者、メアリー・チェイス・ペリー(Mary Chase Perry)とホレイス・ジェイムズ・コーキンス(Horace James Caulkins)に特注して焼いてもらったタイルが使われている。前述のフリーア研究家ブランク博士は、このフリーアハウスのギャラリーのことを「オリジナル(元祖)フリーア美術館」とよんでいる。



5. 孔雀の間

フリーアハウスの中で一番有名なのがこの部屋。しかし、誤解が無いように断っておくが、孔雀の間はワシントンのフリーア美術館に移されたため、現在フリーアハウスに残っているのは、孔雀の間だった部屋である。リンダ・メルル博士のレクチャーにも出てくるので、ホイッスラーと孔雀の間についての簡単な予備知識をここにまとめておこう。



写真上:フリーアハウス内、孔雀の間があった部屋
下:ワシントンDCフリーア美術館にある孔雀の間の北面
写真提供: (上)筆者、(下)フリーア美術館

ホイッスラー

ヨーロッパで活躍したアメリカ生まれの画家、版画家ホイッスラー(James McNeill Whistler, 1834-1903)は、同世代の印象派の画家たち(たとえばモネ)のように、着物や浮世絵、陶磁器、屏風といった日本のモチーフを好んで作品にとり入れた。彼は日本の落款を模して、蝶のデザインをサイン代わりに使ったりもしている。北斎の浮世絵を思わせるちょっと風変わりな構図や、水墨画的なにじんだ輪郭線、単色に近い色彩などに日本美術の影響が感じられる。

1887年(明治20年)、ニューヨークでホイッスラーの版画を目にしたフリーアは、ホイッスラーの作品に魅せられ、感動のあまり言葉も出なかったという。それから、彼のホイッスラーの蒐集が始まり、1890年(明治23年)、フリーアは当時ロンドンに住んでいたホイッスラーを初訪問した。気難しいという評判のホイッスラーではあったが、フリーアのコレクターとしての真摯な態度に好感をもち、彼を丁重に扱った。フリーアはホイッスラーをアーティストとして尊敬し、忠実なるコレクターとして、生涯ホイッスラーの良き理解者そしてパトロンであった。ホイッスラーは、自分の作品を買った後、利益のために売り払ってしまうコレクターを軽蔑していた。そのことを知っていたフリーアはホイッスラーの作品を売却することは一切なかったという。また、フリーアは展示の仕方にも気を配り、壁いっぱいには絵画を並べたり、作品をごちゃごちゃと陳列する当時のやり方に批判的だった。彼が建てたデトロイトの邸宅のギャラリー室やワシントンのフリーア美術館内は、まるで数寄屋風書院のような質素簡潔さを思わせる。

後にフリーアは日本の美術に関心を持つようになるが、これはホイッスラーの影響であろう。19世紀中ごろから、万国博覧会で日本の美術工芸品が紹介されるようになって、ヨーロッパではジャポニスムが一世を風靡したが、その影響を強く受けていたホイッスラーはフリーアに日本に行くことを薦めたといわれている。

ホイッスラーの孔雀の間



ワシントンDCフリーア美術館の孔雀の間(南面と東面) 写真提供:フリーア美術館

ホイッスラーの孔雀の間とは、もともとは、フレデリック・レイランドという海運業で財をなしたイギリス人がロンドンにもっていた邸宅のダイニングルームのこと。パトロンであったレイランドに室内装飾を依頼されたホイッスラーは、緑がかった青と金色を基調にしてその部屋の壁に孔雀の絵を描いた。依頼主の意向を無視した彼の内装作品はレイランドの逆鱗にふれ、のちにロンドンの競売に出されることになった。それを購入したのが、フリーアである。デトロイトの自邸敷地内にあった厩を、孔雀の間の寸法にあ

わせて改造し、そこに孔雀の間を移設した。今はこの部屋の内装はそっくりワシントンDCのフリーア美術館に移されているが、前述したように、孔雀の間の「抜け殻」はまだデトロイトの邸内に残されている。この孔雀の間にまつわるよもやま話をメル博士から聞いたのちにフリーアハウスを見学されることをお薦めする。

では、最後にチャールズ・フリーアという稀代の美術コレクターに焦点を当ててみよう。

チャールズ・フリーアという人物

ペリー提督の率いる4隻の黒船が突如浦賀沖に来航した翌年の1854年(嘉永7年)、フリーアはニューヨーク州キングストンに生まれた。そして、第一次世界大戦が終結した翌年の1919年(大正8年)、彼はニューヨーク市で65歳の生涯を終えた。生涯独身だった。

14歳の時、母を亡くしたフリーアは、父が病身だったため、ハイスクールを中退して働かざるをえなかった。彼の勤勉な働きぶりが、地元キングストンの鉄道会社を任されていた南北戦争の退役軍人フランク・ヘッカーの目にとまった。そして、フリーアは、ヘッカーの鉄道会社の出納係として実務経験をつんだ。1876年(明治9年)、ヘッカーがインディアナ州の鉄道会社へ転職した時、ヘッカーに乞われてフリーアも転職。

1890年(明治23年)ヘッカーとフリーアは、ペニンスラー・カー・カンパニーという、貨物列車の車両を作る会社をデトロイトに創設。自動車産業が興る前のデトロイトでは、鉄道関係が最も重要な産業であった。その後、競争相手の会社と合併。新しくシガン-ペニンスラー・カー・カンパニーとなったが、1893年(明治26年)の株式市場パニックによる大不況に見舞われ、彼らの会社もその影響をまろに受けた。試練の時が続いたが、不況の荒波をどうにか乗り越え、1899年(明治32年)にフリーアは自社と他の13の車両メーカーとの合併を成功させた。アメリカン・カー・アンド・フォウンダリーという巨大な鉄道車両会社を作り上げたフリーアは、その直後、40代の半ばでビジネスからリタイアし、残りの人生を美術の蒐集に捧げることになるのである。

フリーアと日本

トーマス・ロートン/リンダ・メル共著 Freer: A Legacy of Artによると、フリーアは5度来日している。初めて日本に来たのは、日清講和条約(下関条約)が調印され日清戦争が終結した1895年(明治28年)。この時は彼はまだ現役の実業家であった。

再びフリーアが日本を訪れたのは、日露戦争が終わって2年ほど経った1907年(明治40年)。前回と違って、すでにアジア美術コレクターとしてのフリーアの名声は日本でも知られていた。この2度目の日本滞在で特記すべきは、フリーアと、生糸貿易により財を成した横浜の実業家、原富太郎(1868-1939)との出会いであろう。日本有数の



1907年、横浜本牧の原富太郎(原三溪)邸にて。前列左から、原の妻、フリーア、原富太郎、原の娘。 写真提供:スミソニアン協会

アートコレクターでもあった富太郎(号・三溪)は、東京湾を望む横浜の本牧三之谷の自邸にフリーアを招いて歓待した。2週間の滞在中、富太郎は自分のコレクションをフリーアに自由に鑑賞させたという。また、フリーアは、三溪の友人で三井物産の創立

者、益田孝(号・鈍翁)をはじめ多くの数寄者と交流を持った。その後来日するたびに富太郎を訪れたフリーアは、富太郎の長男、善一郎が1914年(大正3年)にイェール大学留学のため渡米した時、デトロイトの自邸に招待している。本牧三之谷の富太郎の庭園は、フリーアが訪れた前の年の1906年(明治39年)から一般に無料で公開され、彼の三溪という号をとって、三溪園とよばれるようになった。2006年に国の名勝に指定されている。

その後、1909年、1910年、1911年(明治42、43、44年)と3年連続して来日し、フリーアは日本美術への造詣を深めた。彼の日本での足どりを辿ってみると、明治の日本を再発見することにもなり結構おもしろいのだが、それはいずれまた別の機会に書く事にしよう。

フリーアとデトロイト

デトロイトで巨万の富を築いたフリーアが、なぜ地元の美術館ではなく、首都ワシントンのスミソニアン協会にコレクションの寄贈を申し出たのであろうか? フリーアハウス友の会(役員19名、会員約145名)の役員の一、ウィリアム・コルバーン氏(William Colburn)はこう答える。「フリーアにとって重要だったのは、彼の審美的ビジョンに基づいて運営する自分の美術館を造ることだったのです。この考えはホイッスラーの影響でもあります。ちょうどその頃、フリーアの友人で彼と同じように鉄道関係で財を成したジェームズ・マクミランがミシガン州の上院議員でした。マクミランは、当時ワシントンDCのナショナル・モール建設計画の委員長で、彼の委員会が作った計画に基づき多くの記念碑や博物館がナショナル・モール内に造られました。おそらくマクミランからナショナル・モール計画の詳細を聞いていたフリーアは、世界中から人が集まる首都こそ自分の美術館を造るにふさわしい所だと思ったのでしょう。そして、国の税金を使うことなく、私財でモール内に美術館を建て、コレクションをスミソニアン協会を通して合衆国に寄贈したのです。残念ながら、1923年の開館を見ることなく1919年に亡くなりました。」

コレクションがワシントンに行ってしまったため、フリーアがデトロイトを無視したかのように思われがちだが、そうではないとコルバーン氏は語る。「フリーアは、デトロイトの文化面での強力なサポーターでした。Detroit Museum of Art(今のDIA)を援助し、DIAの敷地購入資金の一部もフリーアが出しています。デトロイトの地元のアーティストたちへの支援(たとえば、ピワビック・ポッターのメアリー・チェイス・ペリー)、そして、ミシガン大学やThe Society of Arts and Crafts(今のCCS)に対しても協力を惜しみませんでした。彼の財力をもってすれば、世界中どこにでも住めたでしょうが、フリーアはデトロイトのFerry通りの邸宅を終の棲家としました。このことこそ、フリーアがデトロイトを愛していた何よりの証ではないでしょうか。」来る10月25日のフリーアハウス見学ではコルバーン氏もガイドの一人として案内してくれる。この機会に是非デトロイトの秘宝、フリーアハウスを訪問されてはいかがだろうか。

—おわり—

参考文献:

1. トーマス・ロートン/リンダ・メル共著「Freer: A Legacy of Art」 Published by Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution, 1993
2. トーマス・ブランク著「The Charles L. Freer Residence: The Original Freer Gallery of Art」 Dichotomy, Volume 12, Fall 1999; University of Detroit Mercy School of Architecture Student Journal
3. 矢代幸雄著「芸術のパトロン」新潮社版 1958年(昭和33年発行)